

新見正則医院 通信

Summer 2024

慶應義塾大学医学部新聞「論壇」に掲載されました

■ 魔法の生薬（RCTでがん手術後の生存率アップを確認）

64回生 新見正則医院院長 新見正則

外科医として始まった僕の医師人生ですが、移植免疫学をゼロから学ぶためにオックスフォード大学博士課程に1993年から1998年まで留学しました。その後、帝京大学で教職を務めました。帰国直後からセカンドオピニオンを本邦で最初に大学病院で、保険診療でおこないました。西洋医学的治療で限界を感じている方が日本中から受診されました。そして漢方薬に興味を持ちました。その理由は、漢方製剤が保険適用だからです。

しかし漢方薬は臨床試験を経ることなく超法規的に保険適用になっていることがわかりました。そんなエビデンスがほとんどない漢方薬ですが、実臨床では潤滑油としては有効でした。自然と治ったのか、漢方薬の効果で治ったのかは判然としないのですが、困っている患者さんは感謝してくれました

日本では148種類の漢方製剤が保険適用されています。漢方薬は自然界で薬効がある生薬を足し合わせて、効果を増し、副作用を減らし、新しい作用を作ってきたと説明しています。生薬の足し算ですから無限の組合せを作製可能です。ところが、保険適用漢方製剤は148種類で、そこから選ぶだけです。選ぶことは作ることに比べると遙かに簡単です。僕には今の漢方の世界は、簡単なことを難しく説明して、それを既得権益化しているように思えました。そこで、西洋医が簡単に漢方薬を処方出来る方法をモダン・カンポウと称して、フローチャート漢方薬シリーズを多数上梓してきました。

漢方薬は確かに役に立ちますが、過去をいくら勉強しても漢方薬では、がんと梅毒と脚気は治せません。江戸時代の漢方の名医である華岡青洲は乳がんを漢方薬では治せないので、1804年にチョウセンアサガオなどを使用して世界初の全身麻酔を行い、乳がんを摘出しました。杉田玄白は患者の7割から8割は梅毒であったと語っています。漢方薬では梅毒を治せないので、ペニシリンの登場を待つしかありませんでした。また、脚気は小麦や玄米を食すれば治せますが、それを行いませんでした。江戸時代には「江戸悪い」と称して流行した脚気ですが、目の前に治せる素材（生薬）があったにも関わらず、当時も過去の呪縛に囚われていて新しい漢方の開発ができなかったと僕は思っています。



令和6年5月20日 (2)

090-090-41818 第一稿原稿物認可

実際の紙面より

前を向いて漢方薬を開発する必要があります。過去をいくら勉強してもがんと梅毒と脚気は治せないです。僕は漢方薬や生薬でがんの生存率を上げるものを作った25年間探し続けています。まず巡り合った生薬がフアイアです。15年以上前から存在は知っていました。そしてがんの患者さんで、なにか追加の治療を希望する人には試していました。僕の肌感ではとても効いている印象がありました。ところがこれは僕の肌感ですから、人をまったく説得できません。

ところが、2018年にそのフアイアが肝臓がん手術後を対象にした1000例規模のランダム化された大規模臨床試験 (RCT) を生存率で勝ち抜いた論文がGUTに掲載されました。96週後の生存率が投与群で14%近く上まわっていました。僕の肌感が間違っていないことがわかりました。

2018年は本庶佑先生が免疫チェックポイント阻害剤の開発でノーベル賞に輝いた年です。僕が辿り着いた生薬フアイアも免疫力を上げるものと思っています。フアイアの論文は多数が発表されています。PubMedで「Huaier」と入力してください。2018年以前は「免疫力」は怪しい言葉でした。ところが、本庶先生が講演会で「免疫力」を使い、そして講演中にもなんども「免疫力」の重要性を語っています。ついにNHKも「免疫力」という文言を頻回に使い始めました。生薬フアイアは免疫力を上げます。生薬は多成分系で複雑系です。たくさんの作用機序が解明されていますが、複雑系を説明するには不十分です。複雑系の解析にサイエンスが追いついていないと思っています。

(次ページへ続く)

大学教員の時代は、外科学と免疫学、東洋医学の3領域の大学院博士課程の指導を行っていました。そして2013年には「オペラ椿姫が免疫力を上げる」という論文でイグノーベル賞を頂きました。今は、ファイアの啓発普及、そしてファイア以外の抗がんエビデンスがある生薬の探究、抗がん作用を強めるための生薬の組合せの工夫などを行っています。

世界初の抗がんエビデンスを獲得した生薬ファイアには重篤な副作用はありません。また西洋医学的治療との併用が可能ですから機会損失も生じません。問題は経済毒性だけです。なんとか近い将来保険適用になることを願っています。今後とも皆様の応援を宜しくお願い申し上げます。

Yahoo!ニュースに掲載されました

もしもあなたが「がんです」と言われたら、探すべき病院は「近くて普通」「遠くて最高」どっち？

知っておきたい「がん治療のための理想の病院 by オトナサローネ

すい臓がんなど見つかりにくいがんに罹る芸能人のニュースが相次ぎました。

がんの告知とはかつては死の告知でしたが、医療技術の発展とともに「並存する病」の1つへと変化しています。それでも、部位とステージによってはまだまだ、余命宣告に近いケースもあります。

「オックスフォード大留学時にセカンドオピニオンの存在を知り、1998年に帰国、その後、勤務先の大学病院で日本ではじめてのセカンドオピニオン外来を開設しました。ぼくは外科学、免疫学、漢方と3つの専門分野を持っていますが、根底にあるのはすべて『がんとの闘い』でした」

そう語るのは新見正則医院・院長の新見正則先生。

「コロナ禍に独立し、がんのセカンドオピニオンも行うクリニックを設立しましたが、最も質問されるのが『病院選び』です。ならば、先にぼくが知るすべてを書いておこうと、40年以上の医業の集大成として『がん治療病院の選び方』『がんの標準治療は並』『私が描く新しいがん治療』の三部構成で、書籍1冊分の内容を書き上げました。ブログで無料で公開しています」

その内容について伺いました。

結論から言うと、「すべてを満たすがん治療病院は日本には存在していない」

セカンドオピニオン外来で間違いなく全員が質問するのが



慶應義塾大学（東京都港区）



「私はどの病院に行けばいいのでしょうか」なのだと新見先生。

「ぼくは外科医でキャリアをスタートして、免疫学、漢方のキャリアを重ねつつ、現在は消化器外科専門医・指導医として漢方の知識を加え勤務キャリアを過ごしています。約40年の多くの時間をがんと向き合ってきた経験から、自分なりの選定基準を書きました。しかし、7万字を要約して言うと『すべてを満たすがん治療病院はない』です（笑）」

たとえば、国立がん研究センター東病院（千葉県柏市）はほぼ理想的であるものの、陽子線治療は可能でも重粒子線の装置がないと指摘します。これらがんの診療施設には歴然と地域格差があり、全国のほとんどの地域では「そもそも近隣に施設がない」そうです。

「昨今がん治療でよく言われる『標準治療が最善の治療である』という言説も、ぼくの立場からするとニュアンスが若干違います。確かに、標準治療は保険診療の中でいちばん

(次ページへ続く)

よい、つまりいちばん『多くの人』を救うものです、保険診療ですから費用負担が極めて低額です。それは間違いありません

ただし、最近の医療はとんでもない速度で進歩している、この点が重要です、と続けます。

「いまが一番いいなら何であれその瞬間に時が止まり、もうそれ以上進歩しません。一番いいわけではないから進歩していくんです。標準治療は金銭的負荷も考慮したうえでは、今ある最良の治療です。金銭的負荷を外し、近い将来まで視野を広げれば、もっとよい治療が存在します。標準治療とは常に『最多数にとっての最善解』つまり『並み』です。この点を踏まえずに、常に標準治療が最高の治療だという伝え方をするなら、それは正しくないのではと思います」

治療に入る前に。希望を持ち続けることそのものが「がんを根治する」可能性につながる

とにかく、1日でも長生きをしてがんと共存していけば、いつの日か根治や、あるいは他の病気で他界するまでの長い延命に繋がる治療が標準化されてくる。だから希望を失わないことがとても重要なのだ、と新見先生は語ります。現在は「よい奏功を見せる可能性のあるもの」が登場しては

上記記事の続編です

■ 「私のがんの治療法には何を選べばいいですか？」と質問する人が残念ながら命を少し縮めてしまう「納得の理由」

by オトナサローネ

新見正則医院・院長の新見正則先生が40年以上の医業の集大成としてブログで無料公開した「がん治療の病院選び」。『がん治療病院の選び方』『がんの標準治療は並』『私が描く新しいがん治療』の三部構成で、書籍1冊分の内容が解説されています。

その内容について伺いました。前編記事『もしもあなたが「がんです」と言われたら、探すべき病院は「近くで普通」「遠くて最高」どっち？知っておきたい「がん治療のための理想の病院』に続く後編です。

治療の選択時に重要なのは「どの治療方法にするか」ではなく「どのような人生観なのか」

どれもがペニシリン並みの奏功を見せればよいのですが、通常そこまでのクリーンヒットは打てず、「ランダム化された大規模臨床試験」を経て効果が確認されたものが最も信頼できる治療だと考えられています。ランダム化とは、クジ引きで治療群と非治療群を分けるもの。最高のエビデン

どんどん実臨床に上がってくるから。

「先に述べた経済的負荷を『経済毒性』と呼びます。お金がかかりすぎるという意味ですね。経済毒性の低さまでを含めると、最高の治療は確かに標準治療です。例えば、いま最高の放射線治療である陽子線治療や重粒子線治療は保険を適用できるがんの種類に制限があり、適用しても約300万円と高額なため、誰もが受けられるわけではありません」

しかし、どの治療も玉石混交の状態から「この治療が有効である」と信念を持った研究者が長い年月をかけ、時には次世代に託しながら磨き上げていったものです。

「たとえば、ぼくの専門のひとつに免疫学がありますが、人類にとっての初のワクチンであるジェンナーの種痘はあまりにも有効でした。また、世界初の抗生物質であるペニシリンも画期的な薬剤で、瞬く間に普及しました。どちらも、それらの治療法が登場して以降とそれ以前で人類の予後が大幅に変わった瞬間です。よりよい治療というのは常に未来にあるという見本ですね」

ここまで前編記事ではがんの治療の概要を教えてもらいました。続く後編では「がんの治療を選ぶときに記憶しておくべきこと」を教えてもらいます。

スは1000例規模のランダム化された大規模臨床試験で得られるとされますが、本当に治療効果が明らかであればランダム化試験などしなくても著効を体感できます。その好例が種痘なのだろう。

「また、『ランダム化された大規模臨床試験を勝ち抜いた』ということは、二つに差があることを証明したことであり、差の程度、つまり御利益の程度には実は言及していません。この観点からすると、いっけん正しそうなエビデンス至上主義も、実のところそうとも言えないのです。だいいち、日本は平均的によい医療が受けられると言いますが、それだって正しくない」

なぜならば、間違いなく地域偏差があるからだと続けます。

「昨今は医療の進歩でがんは共存できる病気に変化しつつあり、通院も10年15年と思ったより長く継続することが多い。誰だっていま住んでる場所に近い病院がいちばんいいのですが、でも、いちばん近い病院でいちばんいい医療が受けられるわけではない。元気なうちは遠くても通える

(次ページへ続く)

けれど、いずれ通い切れなくなりますから、最後は地元がいちばんとなるのです。ドライな言い方になりますが、がんの治療とはこのように科学的根拠（エビデンス）に従い、またはそれを越え、つらい遠距離通院に耐え巨額をかけてでも最新最善を目指すか、それともゴールを見据えて『並み』で納得するか、各個人のどう生きてどう死ぬかの人生観ごとに考える必要のある問題なのです」

がんの治療は「冴えた1発逆転」ではなく 「たくさんのピースの積み重ね」で行っていくもの

新見先生のクリニックを訪れる患者さんのうち、8割以上はがんのセカンドオピニオンやがんに有効な漢方薬の併用を希望する人です。

「長年セカンドオピニオンを手掛けてきてわかったのは、みなさんがガイドライン的には正しい治療をされているということです。でも、それでも治療に不満を感じ、不本意に主治医に従っている人がどうしてもいる。何か手はないかと思って、ぼくは外科学、免疫学のあとに漢方の勉強を始めました。がんの治療はどうしても副作用があります。抗がん剤であれば体調の不調が起き、外科手術では命を落とすこともあります。せめて、副作用がなく生存率を上げるものがないかというのはすべての医師の願いでもあります」

新見先生は長く漢方を勉強する中で見出したフアイアという生薬の普及活動を続けています。フアイアは前述のランダム化試験を勝ち抜いた、ある意味外科医にとっては夢の生薬ですが、それでも価格が安くはないため、経済毒性ありますと笑います。

「全員が同じものをすべて適用しなくてもいい。できる範囲のことでのいいんです。運動する、睡眠をたっぷりとる、ストレスを軽減する、たんぱく質を食べる、日光浴をする、生きがいを見つける、このようないっけん当然のことでもがんの予後はかなり変わると思っています。ただし、まじめにあまりにもストイックに行うとそれがストレスになり免疫力には悪影響です。それに加えてフアイアのようなものを足せるならさらに予後がよくなる確率が上がります」

ただし、どれもいきなり大幅な確率アップというものではないのがポイントです。経済毒性が少なく、副作用がなく、そして標準治療の機会損失にならないことは、エビデンスが少なくともがん治療のピースとして加えるべきです。そして経済毒性があるものには、明らかなエビデンスを追求すべきです。明らかなエビデンスとは1000例規模のランダム化された大規模臨床試験を示します。

「がんの治療はこうして、自分が実行できる正解のピースを一つ一つ集めてそれを組み合わせ、積み重ねていく足し算です。どれか一つの最高の治療にたどりつこうとする必要はないし、それ一つで安心しきって他のピースを探さなくなるのもよくないです。中には特定の白血病のように骨髄移植ができる、またある種の固形がんのように手術ができる、それで一発治癒というものもあります。でも、ほとんどはコツコツと『免疫力を上げる』ことで自分の体ががん細胞と戦える状態を整えていく環境整備です。身体の持ち主はその環境を整えるコーチのような存在です。そう考えると、がんの治療にもやや客観的に、かつ前向きになれるのではないかでしょうか」

ご参考にさせていただきたい新見正則ブログ執筆記事

【がん治療三部作①】

誰も教えてくれなかつた
「がん治療病院の選び方」



【がん治療三部作②】

がんの標準治療は「並」！
それで十分！



【がん治療三部作③】

私が描く新しい／革新的な／
近未来のがん治療



その他の新見正則のブログ記事については
以下からご覧ください。



<https://niimimasanori.com/blog/>

新見正則医院通信 2024夏号

発行：新見正則医院

東京都千代田区富士見 2-3-10 飯田ビル 5・6階

info@niimimasanori.com

<https://niimimasanori.com/>